

豚目線の管理で成績アップ！

CASE STUDY

繁殖&出荷管理を見直す

試行錯誤しながら成績向上

今回は、1母豚あたり27・3頭の出荷を達成している農場を紹介したい。
農場主にこの成績達成のための秘訣を聞いたところ「特に変わったことはやっていない、教科書どおりにやっている」という答えが返ってきた。11年前に先代から経営を引き継いで以来、課題を謙虚にとらえ、試行錯誤しながら出荷成績を上げていくことで実現してきた(図1)。

出荷管理では「安定した頭数と体重」「さらなる格付評価」を実現するため、出荷豚の選畜作業を独自の方法で行っている。土日の間に従業員総出で翌週出荷予定の肥育豚(毎週200〜250頭)の体重測定を実施。さらに「毎回出荷時に手の平で感じた背脂肪の厚さを、枝肉の格付表にすりあわせて感覚を訓練した」という技術で、農場主が背脂肪厚を予測する。

農場の努力はこれだけではない。出荷豚の定時定量を達成するためには、「夏場の受胎率の低下等の季節の影響」「種付け技術向上」「母豚更新による導入豚への対応」など、さまざまな課題に取り組み、年間を通して安定的な繁殖成績が必要となる。出荷成績と繁殖成績は表裏一体なのだ。

発情確認の徹底

特徴的なのは、繁殖管理での母豚ごとの「クセ」を把握した丁寧な交配作業、そして「母豚カード」

母豚カードへの記録

当農場では、しっかりと母豚の「クセ」を押さえることに注意を払っている。母豚のクセについては、「人為的な刺激には反応しないが、オス豚には許容する」など、できるかぎり細かな情報が母豚カードに記載される。一般的に母豚カードは、母豚の繁殖ステータスを把握するために作成される場合が多いが、当農場ではさらに詳細な情報を書き込んで活用している。

例を挙げれば、種付け時の注意点をランクに分けること。母豚の個体差についての特徴を共有化し、カテーターの入り具合や精液の注入具合を5段階にランク分けし、A1における母豚のクセを見極めていく(表参照)。

このように、母豚カードを活用することで、母豚のクセを網羅的に把握できる。離乳後の発情が1週間ほどかかる母豚も時々いるが、発情を見落としたり確認できなかったりする母豚は、約200頭のうち1頭程度に抑えられている。

養豚農場は安定した繁殖成績が達成できないと、かぎりある豚舎スペースに対して在庫頭数の過不足が生じ、出荷頭数確保のための余計な手間や出費、さらには密飼いによる事故の可能性が高くなる。「古い豚舎施設でも、繁殖・出荷管理に徹底した工夫をすることで、満足のいく成績を上げることができる」という農場の方の言葉に勇気もらった。皆さんも実践してみてくださいだろうか。



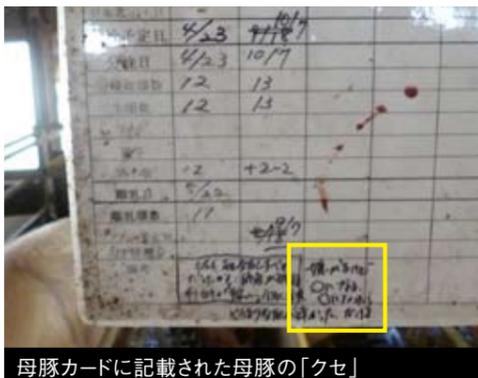
所在地：関東地方 飼育頭数：母豚200頭



群飼豚房の様子



母豚を確認し「クセ」を見極める



母豚カードに記載された母豚の「クセ」

11年かけて母豚1頭につき平均27・3頭まで出荷成績を向上させた当農場。交配から管理まで、成功を実現した過程に迫る。

図1.農場の出荷成績推移

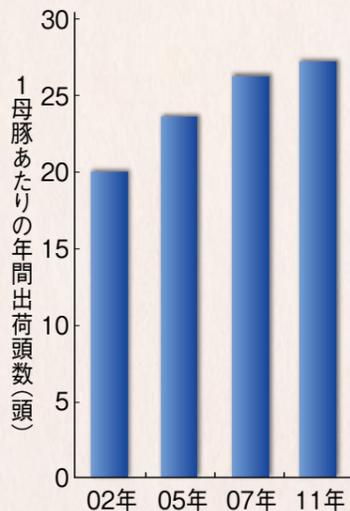


図2.発情確認用の群飼豚房配置

♂	♀♀	♂	♀
♀♀	♂	♀♀	♂

※オス豚は動かさず、母豚を動かす

表.種付けランクの例

ランク	カテーターの入り具合
A	スムーズに挿入される
AB	挿入に若干抵抗があった
B	挿入しにくく、要観察
BC	挿入に非常に時間がかかる
C	ほとんど入らないため、発情確認から見直す

当農場では、高いレベルの出荷成績を維持するために徹底した発情確認を重要視している。農場は分娩舎2棟、妊娠舎2棟で母豚を管理しており、すべてA1精液での種付けだ。
妊娠舎では「子数が生まれないと母乳も吸わず、次の発情も悪くなる」という悪循環に陥らないよう細心の注意を払う。導入豚と離乳後の母豚は、オス豚房に挟まれた群飼豚房に入れられる(図2)。その効果もあってか群飼豚房の母豚には発情微弱は見られず、「発情誘起にはオス豚が必須」という。導入豚に関しては毎月6頭を導入しているが、日齢と体型に関して厳しい導入基準を設けており、適しなれば導入を翌月に遅らせることもあるほどだ。導入豚は必ず発情確認を3回以上行い(より数多く確認することが大事だといわれていた)、さらには1日2回の発情確認により、個体ごとの発情の期間も必ず記録するなど、生涯産子数を見すえた管理を徹底している。